

氏名 出 崎 邦 彦

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学位授与番号 乙 第 5 5 6 号

学位授与の日付 昭和48年 6 月30日

学位授与の要件 博士の学位論文提出者
(学位規則第5条第2項該当)

学 位 論 文 題 目 口腔粘膜の褥瘡性潰瘍に関する研究

論文審査委員 教授 高原 滋 夫 教授 田 中 早 苗 教授 砂 田 輝 武

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

口腔内は身体他部ではみられない歯、ならびに各種歯科補綴物の機械的刺激が、種々な損傷、障害の原因となる。これらの機械的刺激による口腔粘膜の褥瘡性潰瘍については、その変化を経日的あるいは系統的に観察した報告はみられない。

そこで人および家兎の正常口腔粘膜を剝離細胞学的ならびに組織学的に検索し、さらに褥瘡性潰瘍については臨床的、また家兎を用いて実験的に潰瘍を形成、それらの経日的な変化を剝離細胞学的ならびに病理組織学的に観察した。

その結果、人および家兎正常口腔粘膜において、Papanicolaou(以下P)染色による剝離上皮細胞の染色性、変化、細胞径は、上皮の角化と一定の関連性を認め、また組織学的所見における上皮の角化傾向は、剝離細胞学的所見とほぼ一致した。

臨床統計的に、年令別では50才、60才代、性別では女性に多く、刺激期間は、最短4日、最長2年、平均28.3日、潰瘍消失期間は、最短4日、最長31日、平均7.7日、刺激因子としては全部床義歯がもっとも多く、部位別では歯肉、頬、舌、口唇、口底、口蓋の順に多くみられた。

褥瘡性潰瘍の剝離細胞学的所見は、P染色による剝離上皮細胞の染色性および変化、旁基底細胞、白血球、白血球の変性、赤血球、組織球等は刺激期間と一定の関連性を有していた。さらに細胞計測の結果、褥瘡性潰瘍では、正常口腔粘膜と比較して、細胞形質は小さく、細胞核は大きい値を示し、臨床実験では部位による差はほとんどなく、動物実験においては経日的に細胞径、特に核径は小さくなる傾向がみられた。また病理組織学的所見において疾患ならびに上皮の角化傾向は、剝離細胞学的所見とほぼ一致した。

論文審査の結果の要旨

口腔粘膜の褥瘡性潰瘍について、臨床的にその変化を経日的にあるいは系統的に観察し又家兎を用いての実験的潰瘍に於て経日的に剝離細胞学的ならびに病理組織学的に観察し幾多の知見を加えておるが、それら成果は歯および各種歯科補綴物による潰瘍の予防に役立つものと考える。

かくして本論文は医学博士の学位授与の価値あるものと審定する。